

(公財) 中村元東方研究所 / 東方学院

東方だより

第二十四号

〒101-0021
東京都千代田区外神田 2-17-2
延寿お茶の水ビル 4階
tel 03-3251-4081
fax 03-3251-4082
URL <http://www.toho.or.jp>

目次

| | |
|-----------------|-------|
| 理事長ご挨拶 | 1 頁 |
| 事務局長ご挨拶 | 2 頁 |
| 前総務退任のご挨拶 / 芳名録 | 3 頁 |
| 研究員・研究会員の声 | 4・5 頁 |
| 行事報告 | 6・7 頁 |
| 事務局からのご案内 | 8 頁 |



ご報告と御礼を

理事長 前田 專學



去る四月二十五日、翌日行われるパドマ・シリ勲章授賞式のリハーサルが、ニューデリーの大統領官邸で行われました。ニューデリーは何度も訪れたことがありますが大統領官邸の中に入るのは初めてでした。二重、三重の検査を通過して、授賞式の会場となるドームのある広大なダルバール・ホール(宮廷)に入ってびっくりいたしました。ホールの真つ正面、赤絨緞が敷かれた階段を

数段ほど昇った壇上にある大統領の椅子の後ろに素晴らしい仏立像を見つけたからです。よく見ると拙宅の玄関の壁に掛かっている、かつて写真家丸山勇氏から頂いた写真の実物でした。これはジャマールプル(マトウラー)出土の五世紀半ば頃のグプタ仏で、大統領官邸所蔵であることは知っていましたが、まさかこのように官邸の心臓部に安置されているとは想像もしていませんでした。懐かしい人に思いがけず出会ったかのような気がいたしました。

紀元前三世紀に仏教徒であったアショーカ王がブツダ初転法輪の地サルナート(鹿野苑)に造った王柱の、ブツダが四方に向かって法を獅子吼する姿を象徴する四頭のライオンの柱頭を、独立後のインド人が新しいインド国家の意思の象徴ともいべき国家紋章としたのと同じ「真実のみが勝つ」の精神が流れているのを感じました。

翌二十六日ファンファールとともに入場し壇上に登ったプラナブ・ムッケルジー大統領が、仏像に背を向けてあたくも仏像の代理人であるかのように、名前を呼ばれて次々と登壇してくる百二十人ほどの受賞者の胸に勲章を着け、ついで勲記の入った筒を手渡されました。私もその中の一人で、八木毅駐印日本大使ご夫妻もシン首相などのインド政府の要人とともに見守って下さいました。

去る六月十七日には松江のホテル白鳥で、七月二十四日には、東京のインド大使館で、私のために、過分の祝賀会を開催して下さいました。私の受勲自体が、ワドワ・インド大使をはじめ多くの方々のお陰である上に、更にまた祝賀会までも催して頂き、最早御礼の言葉を失っております。この場を借りてただただ心から厚く篤く御礼申し上げるのみでございます。

今一つご報告し御礼を申し述べべき事がございます。一昨年から始まった中村元生誕一〇〇年の記念行事は滞りなく進捗し、去る七月十九日と二十日に、中村先生を中心に創立された比較思想学会の第四十一回学術大会が、記念事業の掉尾を飾る大きな行事として中村元記念館で成功裡に開催されました。これもまた皆様方のご支援とご協力の賜物でございます。

しかし比較思想学会の学術大会といい、昨年の人文系最大の日本印度学仏教学会の学術大会といい、最近はその開催を断る大学さえある中で、当研究所のような弱小な公益財団法人が開催できた秘密は、皆様方のような善意の協力者が多数おられることにあることは言うまでもありませんが、今一つは優秀で、研究所思いの研究員の献身的なご尽力があったからです。研究員の皆さん本当に有り難うございました。

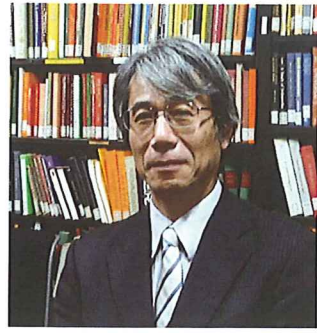
本研究所が最近数年間に取組んできたのは記念事業だけではなく、財団法人を公益財団法人に昇格することでした。幸い平成二十四年七月に認可されましたので事務局の体制を整備・強化し、公益財団法人に求められている変革の必要に迫られて参りました。その結果事務局の人事異動を徐々に行いました。また今まで三木純子理事・総務に、しばしば辞意を漏らされてきたにもかかわらず、余人をもっては代えがたく、ご無理を承知で事務局長代行までもお願いして頂きましたが、それらの重責の上に中村元記念館の創立にともなって、その名誉館長と審議会委員までも加わるようになってしまいましたので、この際、事務局長を丸井浩東京大学大学院教授に、また総務を釈悟震専任研究員にお願いすることになりました。

今後、当分の間、このような体制で本研究所を運営し、中村先生の高邁な理想の実現に邁進する所存でございますので、なにとぞ倍旧のご支援とご協力をお願い申し上げます。

平成二十六年十月十日

バンヤンの木のよう

常務理事・事務局長 丸井 浩



中村元東方研究所のホームページ、トップを開くと、バンヤン（「パニヤン」とも表記）の大樹の写真がすぐに目にとまります。最古のウパニシャッドの一つである「チャーンドーギヤ・ウパニシャッド」には、哲人ウッターラカが、息子シュヴェータケートウに、バンヤンの実を寄せて、梵我一如の真理を説き示す有名な場面があります。ウッターラカが息子にバンヤンの実を細かく割らせ、ついには目に見えない微小な粒になるのを確認させた上で、「まことに愛児よ、お前に見えないこの微小なもの、——実に、この微小なものから、この大きなバンヤンの木がこのように生い立っているのだ。愛児よ、信ずるように。この微細なもの、——この世にあるすべてのものはそれ（最高実在サット）を本質としている。それは真実、それはアートマンである。シュヴェータケートウよ、おまえはそれである。」と語りかける場面は、まことに印象的です。ブツダが菩提樹下で覚りを開いて後にさらにバンヤン樹のもとで瞑想したともされています。

バンヤンは、ベンガルボダイジュとも呼ばれ、ヒマラヤやインド原産のクワ科の常緑高木。バンヤンの繁茂のしかたは実に独特です。幹から広く横に枝を伸ばすと、その枝からいくつもの気根が垂れ下がり、気根は地面に達すると今度は地中で根を張り、気根それぞれが幹に変身して、そこからさらに枝が伸び、バンヤン樹は次から次へと広がって成長してゆきます。酷暑で苦しむインドの人々にとっては、憩いの緑陰を惜しみなく施してくれる、まさに慈しみの木です。

前田専學理事長は、中村元博士が広大な学問の世界を切り開いてゆくさまを、バンヤン樹に喩えて、「インド哲学を基軸に形成され、生き生きと繁茂し、無限に成長し続けて、人々に知の恵みと安らぎをあたえる」と描写され、またその際の根っこは博士の「慈しみの心」であるとも述べておられます。

このようにウパニシャッドの有名な一節に登場し、ブツダの覚りの後の瞑想にも関わり、また中村博士、そして中村元東方研究所にゆかりのあるバンヤン樹に、なんとホルルのワイキキビーチで出会いました。ハワイ大学哲学科のチャクラヴァルティ教授を訪れた今年の三月中旬のことでした。そしてその時に、ささやかながらも新たな発見がありました。それはバンヤンを意味するサンスクリットの単語に関わる発見です。チャクラヴァルティ教授が、浜辺に生い立つ立派なバンヤン樹を指しながら、「サンスクリット名は『ニャグロード』、つ

まり『下に向かつて（ニャク）成長する（木）（ロード）』なんだよ」と説明して下さった瞬間に、「これだ」と思いました。ニャグロードという樹木の名称自体は以前から知っていました。しかし、語源に遡って「下に向かつて成長する」という意味をつくづく考えるようになったのは、この時が初めてでした。

成長といえば通常、上へ成長するというイメージが一般的ですが、「下に向かつて成長する」という、通常の成長観とは逆の、いのちの生成方向を現実にもつ樹木を目の当りにした感動は格別でした。しかも古代インドの知識人はその姿を樹木の呼称に見事に反映させて、「ニャグロード」というサンスクリット語の表現を探り当てたのでした。

昨年四月より、中村元東方研究所の常務理事ならびに事務局長を拝命することとなりました。こうして『東方だより』で皆様にご挨拶するにあたり、長い前置きのお話となつてしまいました。だが、一本調子に右肩上がりの成長ばかりを追い求めてきた現代文明の行く手に、さまざまに暗雲が立ち込めているように思われます。このような今日の時代状況の中で、仏教思想やインドの哲学・宗教、あるいは広く東洋の思想、日本の思想、文化を学ぶことには、格別な意味があるはず。『下への成長』とは、私たち一人一人が、みずからのいのち（アートマン）を支え、育み続けてくれている大地、基盤、伝統、文化といった、いのちの源泉に目覚め、立ち返ってゆく足取りではないでしょうか。下に向かつて成長し、大地からのいのちの源泉を絶えず汲み取ることで、巨大な生命力を育むバンヤンの姿は、私たち一人一人が未来に向けて歩むべき道を示唆しているのかもしれない。

中村博士が高邁な志をもつて創立された、この学び舎に身を寄せ、博士の志を見事に継承されている前田専學理事長のもとで、共に依つて立つ足場を大切にしながら、そのような学びの集いが、さらに広く発展してゆくことを念じ、微力ではございますが励んで参る所存です。どうか皆様、今後ともよろしくご挨拶申し上げます。

最後になりましたが、私も中村元東方研究所の事務局スタッフを、以下にご紹介させていただきます。なお本事務局につきましては、昨年四月に大幅な変更がございました。名実ともに公益財団法人として相応しい事務局体制の一層の強化を図り、私どもの研究所の維持・発展に全力を上げてゆきたいと考えております。どうぞ今後とも皆様、よろしくご挨拶申し上げます。

《本部事務局スタッフ》 事務局長 丸井浩 / 総務 釈悟震 / 主事 森和也

主事補 加藤みち子 / 主事補 佐々木一憲 / 主務 柴崎麻穂 /

主務 新井泰夫 / 局員 西村玲・高柳さつき

《関西事務局スタッフ》 主任 西岡祖秀 / 主事 佐藤宏宗 / 主務 西岡秀爾

局員 山口周子

《中部事務局スタッフ》 主任 日野紹運 / 主事 佐久間留理子

平成二十六年十月十日

総務の日々をふり返って

三木純子



父の没後、東方の組織・運営をどうするか関係者のご議論の結果、母が理事長職を引き受ける事になり、私も母を補佐するため東方の仕事を手伝う事となりました。

最初の仕事は理事長交代の挨拶廻りで、前田先生と母に同行して、関東・関西圏の多くの関係先にご挨拶に伺いました。

当時の事務局は人数が少なく、誰か急用ができると訳も分らないままに私が事務局の留守番役を頼まれる事も多くありました。事務局に詰めていると、主婦感覚で床やカーテンの汚れや、机や書棚の乱雑さが気になり、掃除と整理整頓には随分と時間をかけました。教室確保に不動産屋を巡りましたが、結局教室を広くする為、順次各部屋に有ったトイレ・風呂場・台所を撤去する事になりました。講義のない夏休みに工事をせざるをえない為、毎年八月の暑い日に聖橋を渡りながら、何故私がこんなことを、と思ったこともありました。

また、当時の東方には広報活動と言えるようなものがないという関係者からのご指摘があり、私が広報を担当する事になりました。マスクミ関係先に一人で出かけて、東方のパンフレットを広げてお願いをしたことは忘れられない経験でした。時代の流れに沿ってホームページを作る事となり、Yahoo!というドメインを獲得できた時の喜びを鮮明に記憶しています。事務局のネット網が整

備された結果、連絡ノートからメールが普通になりました。広報誌として「東方だより」を充実させる事となり、私は執筆者への依頼を担当し、講師や昔からの研究会員の方々から直接にお話を伺えた事は感慨深いもので、私が東方で仕事をして行く上での力となりました。

事務局の総務を務めた時代には二つの大きな出来事がありました。一つは公益法人改革であり、もう一つは中村元博士生誕一〇〇年記念事業です。公益法人改革に関しては、特定公益増進法人(特増)申請から始まり、公益財団法人への移行へと困難な課題が山積していました。内部体制の整備が必要となり、税理士の先や役員の方々の格別のご尽力を頂いたことに加えて、当時の主事さん達の頑張りなど多くの皆様のご協力を得て何とか無事に公益法人への移行を実現することが出来た時は本当に嬉しかったと記憶しています。

中村元博士生誕一〇〇年記念事業にまつわる行事の数々に立ち会えた事は身内として大変に感謝しています。松江市に中村元記念館が設立され、父もどんなにか喜んでいるかと思えます。私も松江には何度も通いましたが、関係者の方々の根強い熱意とご尽力には本当に頭が下がり、何度も感動いたしました。

一〇年余りの東方での期間、何も分らなかつた私が何とか無事に勤めさせていただいたのは、前田先生をはじめ多くの皆様のご協力の賜物と深く感謝しております。また、この間に多くの方々とお目にかかり薫陶を受けることが出来たのは幸せだったとしみじみ感謝しております。

平成二十五年度 芳名録 (五十音順・敬称略)

維持会員

- 赤井士郎 史跡足利学校管理事務所 我妻綱子 石田祐雄 今西順吉 小笠原勝治 風間敏夫 門脇英晴 金田泉 川崎信定 久間泰賢 久保維成 黒川文字 小坂機融 金剛院仏教文化研究所 斎藤敬 清水谷善圭 下重好正 釈悟震 春秋社 淳心会 末廣照純 菅原信海 鈴木一馨 高崎宏子 高松孝行 多田孝正 田辺和子 田村晃祐 千葉よし子 中央学術研究所 千綿道人 津田真一 角田泰隆 東洋哲学研究所 奈良康明 成田山新勝寺 西岡祖秀 羽矢辰夫 仏教書録目録刊行会 仏教伝道協会 法恩寺(藤原教文) 法清寺 保坂俊司 前田專學 前田式子 九井浩 三木純子 水野善文 三友量順 武蔵野大学 渡邊信之 渡邊賢陽

賛助会員

- 秋葉佳伸 阿部敦子 石井勝彦 伊藤瑞敏 稲葉珠慶 石上智康 遠藤康 大谷光真 小笠原隆元 荻山貴美子 奥住毅 桂紹隆 加藤妙子 金田静江 菅野博史 北村彰宏 窪田成円 小峰立丸 小山典勇 近藤良一 在家仏教協会 斎藤明 佐久間留理子 桜井瑞彦 桜井俊彦 定方茂 須佐知行 鈴木勇介 関戸先海 大海修一 高橋審也 田上大秀 武田浩学 立花ひろ子 田中良昭 田原豊道 田丸淑子 鶴谷志磨子 長野市南長野仏教会 中村久夫 西川高史 西宮寛 花岡秀哉 濱川香雅里 濱川量子 引田弘道 日限成徳 久富幸子 福留順子 藤井教公 藤田宏達 藤山覚一郎 堀江順司 松原光法 的場浩子 水谷浩志 宮元啓一 森祖道 森田幸子 矢島浩志 山口泰司 山本文溪 由木義文

東方学院後援会

- 一心寺 今宮戎神社 大神神社 奥田聖應 加藤公俊 健代和央 古泉圓順 坂本峰徳 四天王寺 清風学園 瀧藤尊淳 塚原昭應 塚原亮應 出口隆順 出口順得 唐招提寺 東大寺 念法真教教団 平岡英信 廣瀬善重 南谷忠敬 三宅光雄 宮時光映 森田俊明 森田惇明 森田祥明 山岡武明 吉田明良

御寄附 (※中村元博士生誕一〇〇年記念事業へのご寄付とは別になります)

- 加藤純章 川崎信定 克念社 金剛院(山田一真) 釈悟震 春秋社(片山一良) 大慈寺(林慶仁) 谷口博則 田丸淑子 念法真教 松前幸雄 九井浩 吉田義隆 渡邊賢陽

皆様からのご支援に心から御礼申し上げます。

研究員・研究会員の声

連携研究員にさせて頂いて

連携研究員 小松 優香



この度、中村元東方研究所連携研究員にさせて頂きました小松優香でございます。

連携研究員のお話を頂いた当初、中村元思想研究 仏教思想研究、インド哲学研究とは直接関係ない私がこの歴史ある研究所の一員にさせて頂くことに大きな戸惑いと研究者としての重みを感じ、以来自身が引き締まる思いで過ごしております。思想研究を行うというのは、人間の生き方とその人格陶冶に関わる分野で、それを研究対象としながらも同時に自らの生き方について問いつける非常に厳しい面を有する学問に触れることを意味します。中村元先生は、ブツダの教えを分かりやすい言葉で多くの人々のもとに届けると同時に、その教えに忠実に生き、自己鍛錬を繰り返すなかで独自の思想を打ち立てられた偉大な学者でおられます。その高邁な思想を基に設立された素晴らしき研究所で、中村先生のお人柄と思想を感受しながら一連携研究員として学ばせて頂ける事に大変光栄かつ嬉しく存じます。

中村先生の残された言葉のなかに良く知られた有名な二つの訓戒がございます。「インド学はエジプト学ならず」「奴隷の学問にあらず」。これは今日のようなグローバル時代の学問状況において尚一層、明日への一条の光を導き指していると思われれます。「インド学は単なる文献学に留まっていはいけない。文献に書かれていることを実地検証せよ」という点、そして「日本の学問は西歐学問の輸入であってはならない。日本独自の学問を建設せよ」という点、これは古典から学んだことを今日に活かす重要なご指摘であり、西欧との比較において日本の学問の立ち位置と役割を明確にする要諦のように読み取れます。

こうした中村先生の言葉一つ一つに直に接し噛み締めながら、私自身の研究テーマである「小国思想」「石橋湛山研究」について歩みを深めて参りたく存じます。皆様、どうぞよろしくお願ひ申し上げます。

(筑波大学人文社会系准教授)

掌の上

専任研究員 佐々木 一憲



私たちの団塊ジュニア世代が生まれたのは中村先生の東大退官の年前後。先生はすでに「歴史上の人物」といつてよい存在でした。(東方)についても知っていたのはその名称だけで、研究員としての採用が決まった時点では正直なところ、研究所や学院のことについては全く何も知りませんでした。そのわたしが東方について何程かでも知るようになったのは、採用になってからの二か月間、毎週土曜日の釈先生の当番日に事務局に通い続けて受けた「自主研修」以来のことです。中村先生のこと、はもちろん、研究所の成り立ち、阿部先生や上村先生のこと、研究会員の方々のこと——先生は三十年に渡る東方の歴史を実に情熱的に話して下さいました。いかに多くの方々の思いがこの小さな研究所・学院にまつているのかを肌身に感じて、新任の研究員として身が引き締まる思いをしたことを覚えていきます。

二年ほど研究員として勤めていたころ、大変幸運なことに、私にインド留学をする機会が訪れました。中村先生以来親交の深いインド大使館から研究所に直接、研究者派遣のお話を頂いたことでした。この機会を活かしてインドを存分に体験しようと思気込んだ私は、ヒマラヤ山中の高原都市シムラーに十か月、ベンガル地方の中心都市コルカタに二か月滞在しながら、資料研究に調査旅行に、現地に滞在していればこそその活動に明け暮れる充実した日々を送ってまいりました。

その留学中のシムラーでも不思議な巡り合わせがありました。滞在先の研究所が主催したワークショップに講師として招聘されていた高名なパンデイトとたまたま朝食の席で一緒になったときのこと、「日本の『The Eastern Institute』から来ています」と自己紹介したところ、その先生から「コージョー・サトーは知っているか？」との問いかけ。よくよくお話を聞いてみると、その方は中村先生についての本の監修もされ、佐藤宏宗研究員が留学中に師事していた<N>ジャー先生(『東方だより』第16号コラム参照)だったのです!

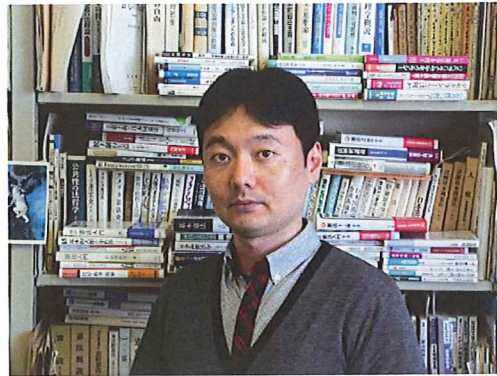
不思議なご縁を感じたこの出会いにより、先生のワークショップに参加させていただいたことがきっかけとなって、その後コルカタの『The Asiatic Society』に在籍する道が開けました。ウィリアム・ジョーンズがオリエンタル・ルネッサンスの幕開けとなる歴史的な講演を行ったこの研究所に、わずか二か月とはいえ所属して研究できたことは、インド学の研究に従事する者にとつて願ってもない大きな喜びでした。

例えば、大学院時代わたくしはインドの学僧シャーンティデーヴァの研究を志しておりました。中村先生に『慈悲』という著書がありますが、その中で先生が大きく取り上げていらっしゃる論師です。もしかしたらわたしは始めから先生の『慈悲』の教えに導かれ、その掌の上を飛び回っていたのかもしれない。行く先々で中村先生ゆかりの方々との出会い導きを受ける「偶然」を思うと、そんな空想もあながちただの勘違いではないように思えてなりません。

覚者の智慧と救いの心をまなぶ

— 3・11 以後にわたしたちはどうするべきか

研究会員（東京） 金井 光生



私は東北出身ではありませんが、ご縁あって約一〇年前に福島大学行政政策学類に着任し、浅学非才ながら憲法学・法哲学を研究しております。市民の権利と平和を護るよう公権力を統制する日本国憲法の理念・精神を、いかに主権者市民の心身にリアルに根づかせ、（特に 3・11 以降の）実効的な弱者救済に生かすのかを原理的に思索するために、普遍的な世界宗教の叡智に学ぼうと考え、サバティカルの今年度、東方学院で仏教思想を、上智大学神学部でキリスト教思想を勉強させて頂いております。

二〇一一年三月一日の東日本大震災と福島原発事故から三年半が経ちました。福島市では大方、低線量被曝問題は未解決ながらも以前の平常の生活に戻っているようです。しかし、被災地全体ではいまだ避難生活で苦しんでいる方々は多く、風評被害も相俟って地域産業の復興もままなりません。他方、全国的には、3・11 自体の風化・忘却が進み、いまや安倍政権は被災者対応もおおざなりに、原発再稼働、特定秘密保護法、集団的自衛権、果ては「平和的生存権」を掲げる日本国憲法の破壊へと突き進んでいます。私も市民向けブックレット『フクシマで日本国憲法〈前文〉を読む』（公人の友社刊）で警鐘を鳴らしたところで、国益のために人権と平和を切り捨てる政治の不穏な動向は、等しく仏性を有する人間の尊厳を蔑ろにするものであって、仏心に適うものとは到底思えません。

思うに、普遍的な世界宗教の真の意義とは、社会的に差別された者たちに言葉を掛け、手を差し伸べて、国益を超えてすべての人間の生を円融へと開くという、まさにそれ自体「奇蹟」と言うべき自利利他の救済精神にあるのでしょうか。今回、学生時代からご業績に親しませて頂いた中村元先生の東方学院で仏教思想を学ぶという貴重なご縁を賜ったことで、少しでも法（ダルマ）に近づき、一切衆生がお互いに平和で幸福に共生できるよう公権力に命令する市民の自覚を生む〈憲法哲学〉を探究していく所存です。

東方学院と私

研究会員（中部） 吉田 義隆



永い間、模索していたが、得度を引受けてくれる寺が漸く見つかり六十を前に浄土系の仏門をたく。住職に勧められたのを幸いと宗門の付属教育機関へ入学。四諦、八正道、十二縁起、聞いた言葉であるが、改めて僧侶として意味を考えれば、所依の経典とどのように繋がるのか？道徳律が何故に宗教迄に昇華したのか？宗教の道徳性は否定しないが、施主にとって佛事は回向の為に

道徳を聴くことでもない。五位七十五法は存在論ではないのか？予想とは違い日を追うごとに、霧は深く、朝題目夕念仏になかなかねない。これでは迂闊に回向もできない。考えてみれば当然の事であるが、宗門にとり所依の経典が数ある経典の中で至上の経典。開祖の解釈こそが至上の教え。その教育機関であればそれが何故に至上であるかを教えるのが役割。そして仏教に関する関連科目はそれを補強する為。然し六道輪廻、浄土と言われても、それは彼岸の世界。実証はできなくても、思考回路でも理解したいと思うのが戦後の教育を受け彼岸の社会で暮らす者（帰依）を大前提としているなかで、本当に（彼岸）はありますかと聴くこと憚れる。宗教では帰依、あるいは（信）を前提とするが、それを深化する経路としては宗教的体験の積み重ねと、論述されたものを手掛かりにしていく方法があるように私は思う。（信）には個人差もあるが、普遍性を持つためには、少なくとも合理的な思考の中でこそ可能ではないか。それにはまずは佛教を俯瞰すること。言ってみれば、教学を離れて亦教学に戻ることが、必要と奮起するも、解説書も含めれば、数ある書籍に唯目目が眩むばかり。何処から手を付ければ好いかも解らず教えを乞うことの必要性を更に痛感。しかし教学を離れてとなると数少ないのが現状のなか、東方学院に到達。恐る恐る、基礎となるであろうと印度佛教文化を受講。受講料を考えれば申し訳ないような少数講座。随分と講師の方には迷惑をかけたが、的外れの質問もハジは掻き捨て。漸く佛教を生んだ文化の基礎を自分なりに納得。基礎的な準備は好かれと受講科目を拡大。ここでも有難いことに少数講座に加えて宗門に捕らわれない講義。此処でも相変わらずハジは掻き捨て、講義中に少しは解った積もりが、講義が終われば再度、霧の中。次にまた訳の解らぬ質問の繰り返し。五里霧中とはこのこと。修練の講師曰く（僧侶は勉強しなければ駄目です）。こんな状態を見越して言ったのかとも思う昨今である。

行事報告

★比較思想学会第四十一回学術大会

ならびに比較思想学会招致記念公開講演会

中村先生を中心に創立された比較思想学会。その第四十一回学術大会が七月二十日、当研究所と特定非営利活動法人中村元記念館東洋思想文化研究所が共同の受入機関となって開催されました。会場は中村先生ご生誕の地、島根県松江市・中村元記念館。



午前中に八名の個人発表、午後にはパネル発表とシンポジウムが行われ、日本全国から同学会の会員およそ百

名が参集して熱い議論が交わされました(写真・上段)。当研究所からは個人発表に吉村均研究員と佐々木一憲研究員が登壇、「共生の思想—中村元の『慈悲』の思想をてがかりに」と題されたシンポジウムでは丸井浩主任研究員がパネリストとして発表。議論をリードしました。夕刻、由志園に会場を移しての懇親会には島根県の副知事と松江市の副市長も駆けつけてくださり、地域ぐるみで中村元記念館を盛り上げていくという機運の高まりが感じられました。

学術大会に先立ち、その前日の十九日には、中村元記念館に隣接する八束公民館を会場に、同学術大会の招致を記念した公開講演会が開催されました。地元松江の方々を中心に、およそ百名の来場者がありました。一人目に登壇した兵庫県立大学名誉教授の岡田真美子博士は「天・雨・海—あめあま考」と題して講演。環境破壊が全世界的な問題となっている現代において、インド由来の輪廻の思想が、今あらたに循環の思想として見直されつつあることが紹介されました。後を受けた駒沢大学教授の角田泰隆博士は「道元禅師と中村元先生」と題して講演。身振り手振りを交え

ての気迫溢れる語り口に、会場は熱気に包まれました(写真・中段右)。

★前田専學博士パドマ・シュリー叙勲祝賀会

公益財団法人中村元東方研究所理事長・東方学院学院長である前田専學博士がインド共和国政府よりパドマ・シュリー (Padma Shri) 勲章をご受章されました。日本人では四人目の受章となります。

このたびの受章は、故中村元博士が築かれた日印文化交流の歴史を継承発展され、三千年に及ぶインドの哲学・思想に関する卓越した専門研究ならびに教育・啓蒙活動を軸に、経済界・産業界等にも広がる総合的な交流の礎を築かれた前田専學博士の半世紀にわたるご功績がインド共和国政府によって認められ、称えられたものです。



前田専學博士は、平成二十六年四月二十六日、ニューデリーのインド共和国大統領官邸において挙行された叙勲式典にご出席され、プラナブ・ムッケルジー・インド大統領より、パドマ・シュリー勲章並びに勲記を授与されました。

前田専學博士のご受章をお祝いするため、公益財団法人中村元東方研究所、駐日インド大使館、公益財団法人日印協会、在日印度商工会議所(東京)・公益社団法人横浜印度商協会、特定非営利活動法人中村元記念館東洋思想文化研究所、山陰インド協会、日本ヴェエダーンタ協会、公益財団法人仏教伝道協会の有志があいついで、平成二十六年七月二十四日、東京の駐日インド大使館ホールにおいて、「前田専學博士パドマ・シュリー叙勲祝賀会」を挙行いたしました(写真・中段左)。



前田専學博士をお祝いするために集った学界・宗教界の諸先生がたを初め、日印友好議員連盟の諸先生がたなど政財界の有志のかたがた総計百六十名を超える出席者で立錫の余地も無い会場には、インドでの叙勲式典の際の映像がモニタで上映され、また、ダンスアーティストの板倉リサ氏により学院歌「慈しみ」に基づく創作舞踊「慈しみの舞」が披露され(写真・下段)、祝賀会に花を添えました。祝賀会の出席者には、前田専學博士より内祝いの品として、博士のご著書『ウパデーシャ・サーハスリー』(岩波文庫)と松江の茶菓が贈られ、皆々感激のうちに祝賀会の幕を閉じました。

★第十一回中村元インド哲学カフェ

「ヨーガの世界と実践と実践」

第十一回中村元インド哲学カフェ「ヨーガの世界と実践と実践」が、平成二十六年七月十三日に、大谷大学で開催されました。今回の概要は次の通りです。

茨田通俊（中村元東方研究所専任研究員・東方学院講師）『テラガーター』や『スッタニパータ』といった初期仏教経典に基づき、禅定、三昧、止観等の瞑想に関する術語について解説しました。

戸田惺山（京都・大徳寺塔頭大慈院副住職）

臨済宗の見地から、ご自身の坐禅体験や人生哲学を述べられた後、参加者に坐禅指導をして頂きました。（写真・上段）

佐藤宏宗（中村元東方研究所専任研究員・東方学院講師）「ヨーガ」の語源的な意味について言及し、また古典ヨーガの根本原理を述べた『ヨーガストラ』に従って、心を制御し、鎮める方法について解説しました。

佐久間留理子（中村元東方研究所専任研究員・東方学院講師）釈迦牟尼が煩惱の象徴である悪魔（マール）とその軍勢を降す仏伝の場面を説明し、



またそれらを描いた図像を示しました。さらに釈迦は、彼の生涯にわたりヨーガによってマールを常に抑えたと述べました。

今回の講座には、坐禅の経験者のみならず、初心者の方々も参加され、ヨーガをテーマとして楽しいひと時を共に過ごすことができました。

★ナマステ・インディア2014

代々木公園を中心とするデング熱患者の発生のため代々木公園A地区が閉鎖されたことにより、開催が危ぶまれて

いたナマステ・インディア2014ですが、公的にはイベント広場であるB地区が閉鎖されなかったこと、また、ナマステ・インディアを開催することで強固不拔な精神に立つ日本とインドとの友好の実績を明らかにするため、実行委員会が開催を決定しました。



オープンングには、ディーパ・ゴパラン・ワドワ・インド特命全権大使閣下が出席され、ナマステ・インディア2014の開催にあたってイベントの成功を勇気づけるスピーチをされました。

平成二十六年九月二十日

（土）二十一日（日）の両日にわたって開催されたナマステ・インディア2014では、公益財団法人中村元東方研究所・東方学院では、例年の通り、東方学院のブースではワークショップを開催し、また、実行委員会より委託されてセミナーハウスを企画・運営いたしました。本年度からエア・インディア・セミナーハウスが新たに別設されたことから、中村元東方研究所の企画・運営するセミナーハウスには東方学院の名を冠して「東方学院セミナーハウス」を名乗ることになりました（写真・中段）。

講師・題目は次の通りです。

九月二十日（土）

吉村均（中村元東方研究所専任研究員）

「日本に仏教が伝わった頃―『日本霊異記』の世界―」

松本榮一（写真家）

「アシヨカ王の秘密―ブダガヤ大塔ものがたり」

保坂俊司（中央大学教授・東方学院講師）

「インドの宗教と生活」

貝澤耕一（平取アイヌ文化保存会）

ワークショップ

加藤みち子（中村元東方研究所専任研究員）

「インドのヤマ天から閻魔大王へ」

小島裕子（首都大学東京非常勤講師・金剛院仏教文化研究所主任研究員）
「ボーディセイナ Bodhisena―東大寺の大仏さまを開眼したインド僧の話―」

* * *

九月二十一日（日）

小西公大（東京外国語大学現代インド研究センター特定研究員）

「フージャスターンの芸能―沙漠と神と人の織りなす音楽世界」

林慶仁（中村元東方研究所専任研究員・東方学院講師）

「日本におけるインド式討論」

貝澤耕一（平取アイヌ文化保存会）

ワークショップ

田中公明（中村元東方研究所専任研究員・東方学院講師）

「MANDALA II」

大角修（宗教評論家・地人館代表）

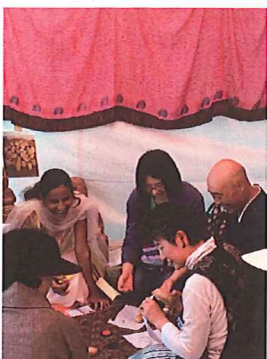
「宮沢賢治とインド・西域幻想」

奈良修一（中村元東方研究所専任研究員・東方学院講師）

「古代インドの遊戯―『ナラ王物語』を中心に」

決して従来通りの来客数とは言えないナマステ・インディア2014において、東方学院セミナーハウスは、これを目当てに来場する方もいるほどナマステ・インディアには定着しており、毎講座、テントいっぱい聴講者に参加して頂きました。

また、東方学院のブースでは、二十一日に東方学院の仏像彫刻講座による「じゃがいも仏」制作のワークショップを行いました（写真・下段）。このワークショップも名物と呼べるほど定着しており、西山多寿子東方学院講師、久富幸子さんを始めとする仏像彫刻講座の研究会員の方々の懇切な指導のもと、多数の来場者を迎え、皆さん思いの「じゃがいも仏」作りに挑み、笑顔で「じゃがいも仏」を持ち帰っていました。



また、東方学院の仏像彫刻講座による「じゃがいも仏」制作のワークショップも名物と呼べるほど定着しており、西山多寿子東方学院講師、久富幸子さんを始めとする仏像彫刻講座の研究会員の方々の懇切な指導のもと、多数の来場者を迎え、皆さん思いの「じゃがいも仏」作りに挑み、笑顔で「じゃがいも仏」を持ち帰っていました。

事務局からのご案内

ご支援のお願い

公益財団法人中村元東方研究所・東方学院は、創立当初の目的を実現するために、多くの方々の善意によるご寄付と学問への熱情によって支えられて過去44年間 持続・発展して参りました。一昨年から、東京本校・中部校・関西校に加えて、中村元記念館に松江校が開校し、創立者中村元博士の高邁な遺志を継承し、今後のさらなる発展を期するためには、広く皆様方からご支援・ご協力を得ることが必須不可欠でございます。

つきましては、当法人の趣旨に賛同されます皆様、是非次の3通りの方法の中のいずれかをご選択いただき、ご支援たまわりたく、ここに切にお願い申し上げる次第であります。

尚、当公益財団法人に対するご寄付は、税法上の優遇措置が受けられます事を申し添えさせていただきます。

(1) 一般寄附

一般寄附は会費と違い、金額や期限等を設定せずに、随時、受け付けさせていただいております。お寄せ頂いた寄付金は、当法人が取り組んでいるさまざまな活動に広く活用させていただきます。

(2) 継続ご支援(維持会員・賛助会員)

当法人の活動に賛同し、継続的に支援して下さる会員も随時募集しています。

・維持会員：一口 年50,000円

・賛助会員：一口 年10,000円

※上記、いずれかをお選びいただき、出来れば複数口をお願いできれば幸いです。

(3) 普通会員：年会費 7,000円

普通会員にも、維持・賛助両会員と同じく、定期刊行物『東方』の他、催し物、会合等のご案内をお送り致しますが、年会費には税の優遇措置は適用されません。

【所得税の減免について】

当法人は文部科学大臣より寄附金控除の対象となる証明を受けていますので、一般ご寄附及び維持会・賛助会の会費は、下記の通り、税法上の優遇措置の対象となります。

【所得控除】所得控除は、所得金額に対して寄附金額の大きい場合に減税効果が大きくなります。「その年の寄附金額-2千円」が、課税される所得金額から控除されます。控除できる寄附金額は、その年の総所得金額等の40%相当額が限度です。

新刊案内



★『ジャヤンタ研究 ―中世カシミールの文人が語るニヤール哲学―』丸井浩 著、山喜房仏書林、2014年2月、14,000円(税別)



★『ブッダの言葉』中村元 訳/丸山勇 写真/佐々木一憲 解説、新潮社、2014年8月、1,400円(税別)



★『大乘仏教の根本(般若学)入門 チベットに伝わる『現観荘嚴論』の教え』田中公明 著、大法輪閣、2014年9月、2,500円(税別)

東方だより 第二十四号
初版 平成二十六年十月十日発行
第版 平成二十六年十一月十一日発行
【編集/発行】
(公財) 中村元東方研究所
本部事務局(東京)
編集責任者 釈悟震

公式ホームページのご案内 (http://www.toho.or.jp)

- ▶ 当研究所の目的・理念・あゆみ
- ▶ 中村元博士の略歴・業績・著作文献目録
- ▶ 東方学院(開講科目、講師紹介、著書紹介)
- ▶ 専任研究員紹介、書籍案内
- ▶ 公開講座、イベントのお知らせや開催レポートなど

さまざまな情報が随時更新されております。ぜひご覧下さい。

